

	本年度の活動	具体的な手立て	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
<p>(日々の研究・公開研究会)</p>	<p>研究メインテーマ「探究活動を中心としたカリキュラムを通して、生活や社会をきりひらく生徒の育成」～生徒一人一人のウェルビーイングを目指して～ ・研究テーマを軸とし、各教科において目標を設定しての授業実践、総合的な学習の時間における探究活動の実施。 ・研究部にも大学の先生方を積極的に招聘し、今年度の研究の進め方等について打ち合わせを行う。 ・7月にプレ公開、11月に本公開を行い、研究の経過と成果を発表する。その後、研究の検証を行い、次年度へとつなげていく。</p>	<p>・全教員が年1回は必ず授業を公開し、授業を見合い、教科研究を進めていく。 ・大学の先生方に研究会等に来ていただき、指導助言を仰ぎながら、本校の研究を進めていく。 ・大学の先生方に各教科等の授業についての指導助言を仰ぎ、授業力の向上を図る。 ・月1回の全体研究会で、教科授業の実践交流を行うなど、教科研究の交流を行う。また、総合的な学習の時間の授業の方法や、進め方について、確認・検討していく。 ・週1回程度、各教科で教科部会を定期的に行い、授業における探究についての研究を進める。 ・文部科学省、三重県教育委員会等が開催する研修会や他附属学校の公開研究会に積極的に参加する。案内等をわかりやすく保管し、職員に周知する。</p>	<p><成果> ・今年度は、7月のプレ公開と11月の本公開があった。ほとんどの教員先生が授業を公開をした。三重大学の先生にも来ていただき指導・助言を行っていただいた。 ・定期的な全体研究会や研究部会、教科部会を行うことで、方向性や現状の確認、今後に向けての検討ができた。 ・今年度は、他校の公開研究会に参加する教員が多かった。その後、ほとんどの教員が、資料を閲覧したり、Teams等で共有したりして、内容を濃縮した。他校のようすがわかり、本校の研究の取組についても改めて考えるきっかけになった。 <課題> ・プレ公開、本公開だけでは、授業を公開しない教員も出てくるため、校内で授業公開期間や各教科もしくは各学年で、授業を公開し、事後検討等を行える機会を作っていくことも必要である。 ・大学の先生に関わっていただくにあたっては、本校の研究についての予めの説明や相談を、もっと丁寧に行うべきであった。 ・全体研究会を基本的に研究部発信で行ったため、部以外の教員が受動的になりがちであった。今後は、部以外の教員にも授業についての発表を行ってもらうなど、積極的に参加できる形に変えていきたい。</p>	<p>●他校の研究会に積極的に参加するのは良いこと。今後も先生方が他校の研究会に参加しやすい環境を整えてほしい。 ●学期に1回、授業参観weekを設定してはどうでしょう。指導案等負担となるものは不要とし、本時のねらいや授業の流れ程度の資料を準備して、自由に参観してもらおう。年3回のweekのうち必ず1回実施する。 ●授業参観については、実施は拡充してきているが、次のフェーズに入っていく必要がある。 ・すでに集まっている以下のようなことを今後の課題解決のために重点的に進めていければよいと思う。 1. 校内での工夫で授業を全員が公開できるように取組むこと。 2. 大学の先生のリソースを本校の授業改善に活用するための事前説明(打ち合わせ)の必要性。 3. 全体研究会について、全員の当事者としての巻き込みが足りなかったため、発表の機会をつくること。 どうしても先生がその積極性や参加についてバラツキができるため底上げをかけるための仕組みが必要である。 ●計画に基づき、相模み今年度の公開研究会や大学連携、他校視察を通じた「外部の視点」の導入が積極的に行われており、組織的な研究推進の基盤が確立されていると感じた。 ●「公開研究会」は、授業公開の広がりや外部との連携、校内での学びの循環という面でも、学校の教育力向上に直結する重要な機会になっていると思う。学校全体で研究を進めるための基盤づくりが進んでおられる。一方で、研究を「特定の教員が頑張る活動」から「全教員が日常的に関わる文化」へと発展させるために、授業公開の仕組みづくりや、大学との連携の深化、研究会の運営方法の見直しといった改善が鍵になると思われる。今後ますますのご発展に大いに期待している。 ●研究テーマを軸として目標を設定した授業実践が日常となっており、プレ公開・本公開において研究成果を発表できている。全教員がめれる授業公開し、主体的に研究活動ができるよう取組みを進めてほしい。</p>	<p>(1) 授業公開の文化化 ― 無理のない形で全員が関わる仕組みへ 【方向性】 授業公開を特定の教員の取組にとどめず、全教員が日常的に関わりやすい形へと広げていく。 【具体的な工夫】 ・学期1回「授業参観Week」の設定(年3回程度) ・指導案は簡略化(本時のねらい+授業の流れ程度) ・年3回のうち1回は公開することを目安とする ・参観後の短時間の振り返り共有 (2) 外部資源活用の充実 ― 大学・他校との連携より効果的に 【方向性】 外部の視点を、本校の研究テーマの深化につなげていく。 【具体的な工夫】 ・大学教員との事前打ち合わせの充実(目的の共有) ・「どの点について助言をいただきたいか」の整理 ・他校視察後の簡単な共有の機会の設定 ・研究テーマとの関連を意識した連携 (3) 研究会の当事者化 ― 全員が少しずつ関わる形へ 【方向性】 研究会を「聞く場」から「対話する場」へとゆるやかに転換していく。参加の度合いの差を少しずつ縮め、研究を全員で支える体制を整える。 【具体的な工夫】 ・短時間で全員が共有できる機会の設定 ・グループ協議を取り入れ、発言しやすい場づくり ・役割のローテーション化(司会、記録など) ・研究成果の見える化</p>
<p>学習環境の整備</p>	<p>1. ICT活用の「質」の向上と学びの本質の両立 2. タブレット端末の適切な使用の定着 3. 教職員全体でのICTスキルの底上げと業務効率化</p>	<p>1. ICT活用の「質」の向上と探究的学びの融合 (1) 生徒の主体性を引き出す探究活動にICTを活用 (2) 探究活動の情報収集・発表・フィードバックにタブレットを活用。 (3) 学習目標との結びつきを明確にICT活用時は、「この活動が何の学びにつながるのか」を生徒にも共有する。 2. タブレット端末の適切な使用の定着 (1) デジタルシティズンシップ教育の系統的实施 (2) 端末管理ルールの再確認と徹底 年度初めに借用同意書の提出。 (3) 破損対策として持ち運び指導など 3. 教職員全体のICT活用力向上 (1) 生成AIの効果的な活用についての研修 (2) DX化ができるものを率先してDX化する。 (3) ICTに習熟した教員が、他の教員のサポートを行う。 (4) 管理職もClassroom入り運用する。</p>	<p><成果> 年度当初の規定確認や同意書回収は非常に円滑に行われた(項目2-3:評価4.3)。また、日常利用が進んだことで、生徒のタイピング速度向上やプレゼン作成能力など、「文房具」としての活用スキルが着実に定着している(項目2-6:記述回答多数)。 <課題> 破損時の弁償判断基準や、日々の充電不足への指導など、現場教員の負担となる運用面の課題が残る。また、デジタルシティズンシップ教育の計画的実施(項目2-1:評価3.4)が他の項目に比べ低調であり、次年度の重点項目とする必要がある。 <検討していきたいこと> ロイロノートは便利だが、今後の情報活用能力の育成を考えたときに、ロイロでは限界がある。可能な教員には、ロイロから離れて、Googleクラスルームを授業でも使っていくことを提案していきたい。ロイロ使っていることで、情報活用をしているということにはならない。</p>	<p>●確かにロイロノートは教室での授業で便利のため、頼りすぎると聞いている。生徒は今後、様々なアプリケーションに触れることになるかと想定されるので、固定せず、先生からも多様な情報活用と多様なシステムのメリットデメリットを伝えながら実践して欲しいと考える。(生徒のほうは難く使いこなすでしょうか) ●事務手続きの円滑化や、生徒の「文房具」としてのスキル向上など、基盤整備が着実に進んでいる点が評価できる。 ●ロイロノートからGoogleクラスルームを使用することは、単なるツールの変更ではなく「社会で汎用性のある情報活用能力」を見据えた対応ということ、期待したい。 ●学校の「学習環境整備」は、ICTの定着と基礎スキルの向上という大きな成果を上げていると思う。一方で、運用面の負担やデジタルシティズンシップ教育の不足など、改善すべき点も多々あるのではないかとと思われる。今後は、ICT「使える」段階から、「学びを深めるために使いこなす」段階へ、さらなる発展に向けて進めることを期待している。 ●端末機器の更新など、ICT環境の整備が着実に進められている。デジタルネイティブである生徒たちへのデジタルシティズンシップ教育は、学校として積極的・計画的に実施することが望まれる。</p>	<p>1. 使うアプリを広げる(ロイロノートだけに頼らない) ・やること: 今までは便利な「ロイロノート」が中心でしたが、今後は「Google Classroom」など、他のアプリも少しずつ授業に取り入れます。 ・理由: 生徒が社会に出たときに、どんなシステムでも柔軟に使いこなせる力(情報活用能力)を育てるためです。「この場面ではどのアプリが便利か」を生徒自身が考えられるように促していきます。 2. ネットや端末の「正しい使い方」をしっかり教える ・やること: 「デジタルシティズンシップ教育(ネットのモラルやマナー、安全な使い方)」を、年間計画に組み込み学校全体で教えます。 ・理由: 生徒が安心してデジタルツールを使えるようにするためです。評価アンケートでも「もっと計画的に実施してほしい」という声が多く挙がっています。 3. タブレットを「文房具」から「考えるための道具」へ ・やること: 「タブレットが壊れた」「充電を忘れた」「授業中に壊れた」段階から、探究学習などで「考えを深める・まとめる」ための活用へレベルアップさせます。 ・理由: 生徒の基本操作スキルはすでに十分身につけていると評価されているため、次はそのスキルを活かして、より質の高い学びにつなげる時期に来ているからです。 4. 先生たちの「管理の負担」を減らす ・やること: 「タブレットが壊れた」「充電を忘れた」といった日々のトラブルに対し、先生個人の負担にならないようなルールや仕組み(生徒に自己管理させる等)を作ります。 ・理由: 日々の運用対応で現場の先生たちが疲弊してしまっているという課題があるためです。</p>
<p>教育実習</p>	<p>・教育実習を円滑に実施するために、大学との縁戚を一層深める。 ・実習生の指導を通して、教員自身が指導力向上に務める。また生徒理解の力を高める。 ・教育実習を通して、教職の魅力を伝え、将来の教育を担う人材育成に務める。 ・教職大学院生の実習を積極的に受け入れる。</p>	<p>・5月末から2週間、9月に4週間の実習を行う。事前指導において、対面での指導に加え、Teamsを使い計画的かつ綿密に指導を行う。綿密なやりとりを通して実習前や実習中の不安を軽減し、実習に取り組みるようにすることで、教職の魅力を発信する。 ・配慮が必要な実習生について、滞りなく実習が進むよう担当者が必要な情報を共有する。 ・教育実習の期間を研究の一環と位置づけ、実習生への教科指導・学級指導を通して、教員自身の授業や学級指導などを振り返る。また、実習生の授業参観により、生徒を多面的に観察し、生徒理解を深める機会とする。 ・教職大学院生に実習計画と予定を与え、効率的に研究課題に取り組ませる。</p>	<p><成果> ・今年度より2W実習4W実習とも、実習生控室の机の配置を各教科ごとに対面できる机配置にした。指導案検討などの中で実習生同士のつながりをつくることができた。 ・4W実習より、iPadの貸し出しを行った。実際に現場に入った時のことを想定した授業を、実習生が体験し行うことができた。 ・学生本人による配慮申請に加えて、大学の指導教官からの申請があったことで、学生の不安を解消し丁寧な指導体制をつくることができた。 ・指導案をはじめとする全ての提出物、学級の連絡などをTeamsで行うことで効率化が進んだ。また4W実習では、実習生から大学の提出物をファイルセンターを使うことで効率化が進んだ。 ・実習生・教員ともに実習を成長の機会ととらえ、実習生は実習後の成長となり、教員は自分の授業の見直しをすることができた。 <課題> ・遅刻や早退が目立つ実習生や、提出物を提出期限が過ぎても出さない実習生が増えている。 ・教育実習に対する意欲が低い実習生が、増えてきていると感じる。 ・辞退の学生や欠席の学生がいたことで、同学年同教科の実習生や担当教員が授業をフォローした。附中教員や、実習生に、過重な負担がないようにしていく必要がある。 ・上の3つの課題に解決に向けては、実習生の普段の学生の様子や配慮事項について、些細なことでも伝えてもらう必要がある。また中学校では事前指導を含め、より具体的な指導を行うとともに、大学では、社会人あるいは教員を志すものとしての指導を充実させてもらうことも必要である。その上で、これまで以上に中学校と大学側との情報交換や協議を日常的に行う体制づくりを行いたい。 ・iPadに関して、必要なアプリが入っていなかったり、Wi-Fi環境が良くないことにつながらなかったりして実習生が授業で困っていた。環境の整備が必要である。また使用について、授業での効果的な使い方および使用時のモラル・実習終了後のログアウトなどについて、大学や附属中学校の事前指導の中で実習生に教示していくことも必要である。</p>	<p>●実習生の指導を通して、教員が自分の授業を見直す機会とするのは、とても良いことである。ぜひその考え方を共有し続けてほしい。 ●年々、教員採用試験の受験者が減少中、学生の意識低下も避けられないかと感じるが、教職の魅力を感じさせること、学生同士つながりを強める取組を地道に続けてほしい。 ●教育実習に参加する学生の扱いは、大学も学校も苦慮するところだと推察する。 ●業界において、期限を守らないとか遅刻が多いとかは新入社員に多く見られる。 ●職業選択において教職を選んでは欲しいが、誰でもいいわけはない。実習で社会人としての基本マナー(ルール)は教えるべきと思う。 ●どちらにしても企業に入社すれば入社してからビジネスマナーも含め徹底的に研修を受ける。 ●大学と連携し、実習前研修の中心を共有しながら、事前に教育してもらおうと、本校に来てからも重要性を伝え入してのビジネスマナーを徹底させることが重要だろう。 ●ICT(Teams・iPad)の積極活用や座席配置の工夫により、実習の効率化と実習生同士・教員との連携強化が図られた点は大きな成果。ICT利用環境の整備・モラル指導の徹底が必要。 ●附属の「教育実習」は、実習生自身の成長を支える環境づくりやICTを活用した効率的な運営など、多くの成果を上げていると思う。一方で、実習生の意識や運用面の課題も明確であり、大学との連携強化が今後の鍵になると思われる。 ●附属が教育実習を「学校全体の学びの機会」として位置づけ、改善を重ねながら取り組んでいる姿勢が高く評価し、今後も、次世代の教員育成に貢献する実習体制の充実が進むことを期待している。 ●実習期間を生徒・実習生・教師にとって有意義なものとするためにも、事前指導の徹底と大学側と一層の連携が必要である。学生を受け入れる学校側の労力は多々あるものと察するが、附属中での教育実習経験によって一人でも多くの学生が実習で教職を目指すようにつなげてくれることを望む。</p>	<p>附属学校における教育実習は、実習生のみならず、教員・生徒・地域にとっても学びの機会である。本附属校としての使命を自覚し、大学との連携をさらに深化させながら、地域社会に信頼される質の高い教員養成に貢献していきたい。遅刻や提出物の遅延など社会人としての基本的規律に課題が見られる実習生が一部存在すること、実習への目的意識や意欲に差が見られることも事実である。これらの課題に対して以下の取り組みを行っていきたい。 ・大学と事前研修内容を共有し、服務規律やビジネスマナーに関する指導を一層充実させる。 ・実習開始時に本校としての基準や期待を明確に示す。また実習中も同じように基準を明確に示していく。 ・実習前後および実習中の実習生の気になることや取り組みのようすの情報交換を制度化し、実習生への継続的な協議体制を整える。 ・実習で学生同士のつながり(同教科内での相談や同じ配属学級同士での相談)を教員としていくような指導体制を強化する。 ・ICT環境整備と情報モラル指導を大学と協働して行う。 など、大学との連携の質を高める取組を進めたい。</p>
<p>キャリア教育</p>	<p>・キャリアパスポートを活用して自己分析し、汎用的能力を高める。 ・進路適性検査等による生徒自己理解、職業調べの交流を通じての様々な職業機会の学びをふまえた。自己の将来について考える機会を設定する。 ・個々の発達段階に応じて年間を通して面談を行う。 ・道徳、特別活動、総合的な学習の時間において外部機関や施設の効果的な活用を図るとともに、計画的・系統的に行い、充実を図る。 ・教育実習生との交流の中で、自分の将来の姿を重ね合わせ、大学で学ぶことについて考える。 ・探究学習において、外部機関と連携をしていく中で、社会の中で働くことについて考える。</p>	<p>・キャリアパスポートを活用し、年度や学期の節目で、めあての設定・確認、自らの取組の振り返りを中心に指導・支援する。 ・キャリアパスポートをより魅力的にできないか検討する。 ・教育相談、進路相談の実施(全学年) ・職業調べ、探究学習に関わる体験学習等の実施(1年) ・三重大学への校外学習の実施(2年) ・命を大切に授業。幼稚園訪問の実施(3年) ・進路希望調査の実施、オープンスクール等への参加、進路ガイダンスの実施(3年) ・学部と附属学校教員との連携授業の活用(全学年)</p>	<p><成果> ・教育相談や進路相談を、年度計画に位置付けて、行うことができた。生徒の日常の悩みや、進路選択についてなど、把握することができた。 ・3年生に対して、昨年度と同様に、進路通信やその他の進路関係の資料を誰でも見られるように、Webで掲載した。不登校傾向の生徒・保護者への連絡の手段としても有効であった。 ・2年生は、大学への校外学習で、将来の進路について考えることができた。また、津市・伊勢市・桑名市を訪問し、某年度の修学旅行に向けて平和学習を行った。(2月) ・1年生は、探究学習「魅力ある学校づくり」に関わり、私立中等高等学校と、亀山市立中学校を訪問し、研究を深めていく。(3月) ・全学年とも、探究学習のテーマによるが、企業や公共施設等の外部機関と関わりを持つことができた。 <課題> ・キャリアパスポートを十分に活用できていない。もっと魅力的で有意義なキャリアパスポートに改善していく必要がある。 ・職業調べや命を大切に授業ができなかった。年間計画に位置付けて実施していきたい。</p>	<p>●附属の生徒は大切に育てられているがゆえに察する能力にもたけていて、親や先生の想いを反映した言動に気づかぬところがあるように見受けられる。(それは本校の生徒に限ったことではないですが)それゆえ先生方も生徒の主体性を引き出すための努力をしてみようと感じる。 ●キャリア教育に関しては、親や先生の望みや意見をアウトプットするのではなく、自分の望む未来を主体的に自分で見つけられないか、行動しうまくいかず、またチャレンジし、を繰り返すことが探究かと思う。 ●生き方や働き方は1人ひとりの主体性から育まれるので、まずはありのままの自分自身を受け止める強い力。その上でなりたて自己像を育む。自分自身の自立・自律を目指す。できれば自分の能力を自分のためだけでなく、人のために使うことをイメージする。そうし少し先の目標を見つめることで今が見えてくると、学ぶ意欲にも繋がります。 ●外部機関や大学との連携、およびWebを活用した情報発信など、多角的なアプローチで生徒の視野を広げる取り組みがなされている。特に不登校傾向の生徒への配慮や、探究学習を通じた社会との接点作りは大きな成果。「命を大切に授業」など未実施となった項目については、教育課程内の優先順位を見直し、次年度の年間計画への確実な組み込みを期待。 ●附属の「キャリア教育」は、相談体制の充実、ICTを活用した情報提供、探究学習や校外学習との連動など、多面的で質の高い取り組みが進んでいると思う。生徒が自分の将来を主体的に考える機会が豊富に提供されており、キャリア形成の基礎づくりが着実に進んでいる一方で、キャリアパスポートの活用や職業調べの実施など、改善すべき点も明確で、これらを計画的に補強することで、キャリア教育の質はさらに高まるのではないかと思われる。 ●キャリアパスポートを十分に活用できておらず、より魅力的で有意義なものに改善していく必要があるという課題が昨年度より引き続きあげられている。内容の見直しや記入の工夫、活用場面の設定など、具体的な見直し作業が必要である。</p>	<p>●自己理解を深める機会を充実させ、なりたて自己像の具体化と自立・自律の育成を図る。 (具体案) ①・2年生の段階で職業調べを実施し、自身のキャリア設計について考える機会を設ける。また、職業調べだけでなく、青年会なども連携しながら命を大切にすることを誓う機会を設定し、自身の生き方について見つめなおす機会を設ける。 ●キャリアパスポートの内容・記入方法・活用場面を見直し、計画的かつ継続的な改善を進める。 キャリアパスポートが有意義に活用できるように、内容の精査と活用方法を明確化し、年度の初めに、各学年で行事などと評価項目・評価方法がリンクするように整理する。</p>

<p>生徒指導</p>	<p>【教育相談】 ・学校生活における生徒の悩みや思いを把握して、生徒理解に努める。 ・担任、学年の先生、養護教諭、SC（スクールカウンセラー）、外部機関（三重大学・津市子ども教育センターや各市町相談機関）など、様々な窓口で相談できる体制をつくる。 ・不登校生徒への困り感の把握に努め、不登校生徒への対応を学校全体で進める。 【生徒指導】 ・「つながりある個」の理念のもと、一人ひとりを大切にし、教職員が同じ方向性をもって生徒を育てる。 ・いじめの未然防止と早期発見・早期対応に努める。 ・附属学校園いじめ防止基本方針及びいじめ防止対策年計画について共通理解を図る。関係機関と連携し情報リテラシー、ネットモラルの指導を充実させる。 ・生徒指導部会を週1回開催し、情報共有・共通理解を図り、統一した指導を進める。 ・4月に講師を招聘し、心のあり方や生き方について、生徒だけではなく保護者にも呼びかけ、講習会を開催する。</p>	<p>【教育相談】 ・月に1回程度、「教育相談だより」を発行し、生徒が気軽に相談できる環境づくりや相談窓口の周知を図る。 ・学期に1回、全校生徒を対象とした計画的な教育相談を行う。また、それ以外の場面では、困り感のある生徒に寄り添い、迅速に対応していく。 ・SC、養護教諭、三重大学・津市子どもセンター（ほほえみ教室）、附属学校特別支援教育支援室と連携しながら、不登校生徒の困り感の把握に努め、継続的な教育相談および支援を行う。 【生徒指導】 ・生徒一人ひとりが「自己決定する場」を多く設定し「自己存在感」を与え、生徒間または生徒と教師との間で「共感的な人間関係」を築く。 ・附属学校園いじめ防止基本方針及びいじめ防止対策年計画について共通理解を図る。関係機関と連携し情報リテラシー、ネットモラルの指導を充実させる。 ・生徒指導部会を週1回開催し、情報共有・共通理解を図り、統一した指導を進める。 ・4月に講師を招聘し、心のあり方や生き方について、生徒だけではなく保護者にも呼びかけ、講習会を開催する。</p>	<p>【教育相談】 ・週に1度、部会をもち、SC(スクールカウンセラー)や企画経営室の先生と情報共有しながら、不登校生徒の現状を知り、今後の支援について検討することができた。本人の思いや願いを聞いた上で適切な支援方法を考えるために、生徒や保護者と密に連絡を取っていきたい。 ・学期に1回、教育相談を行うことで、生徒の困り感を聞き取り、寄り添うとともに教員間でも情報を共有し、その後の対応に生かすことができた。 ・今年度新たに「教育相談だより」を発行し、SCを身近な存在として知ってもらうことができた。それがきっかけで相談を申し出た生徒もいたのは成果であった。また、養護教諭がSCの予約状況を把握し、即時対応が可能な体制を整えることができた。次年度も、2カ月に1回を目標に「教育相談だより」を発行し、気軽にアクセスしたり相談したりできるしくみをつくっていききたい。 【生徒指導】 ＜成果＞ ・昨年に引き続き、生徒指導体制を明確にし、各学年の担当者を中心に学校全体を見ていくことで先手打つ生徒指導を行った。 ・生徒会と協力し、「ピンクリボン運動」を年2回行うことができた。 ・附属学校園いじめ防止基本方針の見直しを行った。 ・4月に作家の歌川たいじさんを招聘し、心のあり方や生き方について、生徒だけでなく職員、保護者も講演を聞き、一緒に学ぶことができた。 ＜課題＞ ・登下校のマナーや日常生活のルールを守れない事例もあつたため、日頃から当事者意識を高める言葉かけや具体的な対応を考えたい。</p>	<p>●ここ数年で教育相談体制が確立されつづくと感じる。附属中の生徒にとって、悩みや困り感を聞いてくれる場があることは、とても重要である。今後一層の充実を図ってほしい。 ●生徒一人ひとりが「自己決定する場」を多く設定し「自己存在感」を与え、生徒間または生徒と教師との間で「共感的な人間関係」を築く。これにつきあおうと思う。素晴らしいです。 ●生徒も先生も人間として、お互いへの思いやりや高めの合言葉や時間を過ごせたら素敵だと感じる。生徒本人にとって必要だと感じる情報を提供し、選択肢を広げてあげて欲しい。 ●また先生が自身のあり方も大切である。先生がどのような気持ちで生徒に向き合っているのかを、お聞きする時間も大切にし、相談できる体制を築いてほしい。そうした率直な開かれた人間関係が、生徒にもよい影響を及ぼすと思う。 ●「教育相談だより」の新規発行やSCとの連携強化により、相談窓口の可視化や即時対応体制が着実に整っている。特に、広報活動が実際の相談に繋がった大きな成果。 ●附属中の「生徒指導・教育相談」は、組織的な体制づくりと丁寧な支援を両立させており、生徒の安心感や学校への信頼感を高める取り組みが着実に進んでいると思う。 ●附属学校園いじめ防止基本方針の見直しを行った。附属学校全体で共通理解を深め、関係機関と連携し情報共有を高め、生徒の困り感を聞き取り、寄り添うとともに教員間でも情報を共有し、その後の対応に生かすことができた。 ●「先手打つ生徒指導」により、問題行動等を未然防止することは重要である。生徒アンケート「いじめやトラブルへの対応」では、学年が上がるほど肯定的回答の割合が多くなっており、大いに評価できる。いじめやトラブルが隠れてしまわないように今後も取り組みを進めてほしい。</p>	<p>【教育相談】 ●生徒一人ひとりの良好な関係性 ・生徒の声を丁寧に取り止め、今後も学校全体で支える。 ・生徒との共感的な人間関係の構築、また、生徒同士の共感的な人間関係を構築する。 ・将来の進路に関して選択肢を提示する。 ●SCに相談しやすい環境づくり ・「教育相談だより」を2カ月に1回程度、発行し、引き続き、相談しやすい環境づくりに努める。 ・養護教諭と連携し、引き続きSCの空き状況を共有する。 ・悩みや困り感を気軽に相談できる場を更に充実させる。 【生徒指導】 生徒へのアンケートの結果を受け止め、教育相談と相互に連携し、包括的な体制を引き続き築く。 ・新年度も「共感的な人間関係」を日々、構築させていくことで問題行動に対し、未然防止を防いでいく。そして早期対応や早期ケアにも積極的に取り組む。 ・定例となってきたが、教員、生徒、保護者に向けて講習会を次年度も開催したい。</p>
<p>道徳教育</p>	<p>・各学年ごとに年間指導計画を作成し、生徒の実態にあった指導方法の工夫、考える道徳、話し合う道徳についての実践を重ねる。特に、「命」や「社会のルール」に関する教育を推進する。 ・学年全体で道徳心を育てていく体制をつくる。 ・評価に関して生徒の行動変容につながるものとなるようにする。</p>	<p>・道徳科との関連を意識しながら、各教科における道徳教育のねらいを明確にし実践する。 ・生徒情報を密に交換し、実態を把握した上で指導案を検討する。学年の担当教員が全員で道徳の授業を行う。また、道徳の授業だけでなく学校生活全体で道徳的諸価値を意識した指導を行う。 ・授業での生徒の振り返りに対して教師が適切なフィードバックを行う。 ・定期的に学年相互の授業参観を行う。事後検討会により指導の改善を図る。 ・研修会への参加や先達校への視察など、道徳教育の研修を深める。 ・学期後ごとの個別懇談会で道徳に関わる行動の様子を伝えることを心がける。</p>	<p>＜成果＞ ・道徳的諸価値を意識した授業を計画的に実施することができた。 ・学年の教員が全員で道徳の授業に関わることができた。ロイノートに振り返りを貯めていくことで、授業担当者以外でも生徒の考えを見ることができた。 ＜課題＞ ・授業参観については個人的に行う教員はいたが、道徳担当から積極的に参観を促すような発信はすることができなかった。そのため、十分な事後検討会は行っていない。教員同士が簡単に授業の様子をフィードバックできるようなシステムを構築したい。（例：フォームを活用して、生徒の学んでいる姿を一言記入するなど） ・附属小学校の道徳授業の参観を行った。中学校には道徳を専科にしている教員がいないため、授業公開をどのようにするかは検討課題である。</p>	<p>●道徳の授業については先生からの誘導にならないように、価値観を押し付けないように配慮しながら実施されたことは承認している。できれば授業で、生徒の本音を引き出し、多様な意見を聞きそれを受け入れ、自分の言葉で意見表明ができるよう準備して欲しい。道徳の時間が優い、楽しい時間であって欲しい。 ●学年全員で授業に関わる体制づくりや、ロイノートを活用した生徒情報の共有は、組織的な指導として非常に素晴らしいと思う。 ●附属の「道徳教育」は、計画的な授業実施、教員全員で関わり、ICTを活用した生徒理解の深化など、多くの成果を上げている一方で、授業公開や教員間の学び合いの仕組みづくりなど、改善すべき点も多々あるのではないかと感じる。今後さらに「対話の深い学び」を実現する道徳教育へと発展していくことを期待する。 ●学年担当の教員全員による指導体制を今年度、さまざまな利点が生じている。生徒一人ひとりが自身の考えを出し合うことができる授業づくりをすすめて、道徳教育をさらに推進してほしい。</p>	<p>学年全体で道徳の授業に関わる体制づくりや、ICTを活用した生徒理解の共有など、組織的な実践を進めることができた。一方で、授業参観や事後検討会の仕組みづくりについては十分とは言えず、教員同士が日常的に学び合う体制の構築が課題として残った。 ○教員の成長の場として以下の内容に取り組み ① 定期的な授業公開の設定 ② フォーム等を活用した簡易フィードバックシステムの導入 ③ 附属小学校を含む、他校の研究会への参加を進め、教員同士が気軽に意見を交わし合える環境を整えたい。 ○学校関係者評価で指摘された「生徒の本音を引き出す授業」「多様な意見を受け入れ合う温かな対話」の実現に向け、関心の工夫や発問の精選をさらに進める。生徒が安心して自分の言葉で語る道徳の時間をめざし、「道徳的諸価値に基づき、考え議論する道徳」を目指し、授業の質的向上を図る。 ○生徒一人ひとりが、自らの価値観を見つめ、多様な他者と対話しながらよりよく生きる力を育む道徳教育を、次年度も全校体制で推進していきたい。</p>
<p>特別支援教育</p>	<p>・生徒一人ひとりの実態を踏まえて、本人や保護者の思いやニーズを把握しながら、長期的な視点で適切な対応を図る。 ・SC（スクールカウンセラー）と連携し、より効果的な支援を推進する。</p>	<p>①学年会や特別支援部会の中で、現在の支援状況を常に検討していく。 ②日々の学校生活の中で、困り感がある生徒を把握し、長期的な視点で適切な対応を検討していく。 ③必要な生徒には「個別の指導計画」を作成し、多面的で組織的な支援を生かす。作成に際しては保護者の了解及び、保護者会で保護者の方に確認していただき、今後の支援の方向性を検討していく。 ④「不登校傾向児童生徒の状況シート」を活用し、不登校生徒の状況把握するとともに、長期欠席の未然防止となるような早期な対応を行う。 ⑤兄弟姉妹関係の相談や引継ぎについて、附属小学校と密に連絡を取り合っていく。</p>	<p>＜成果＞ ・特別支援教育部会では、SCを交えて各学年の生徒情報を共有したり、今後の手立てについて話し合い、具体的な短期目標を設定する場を持つことができた。 ・「ほほえみ教室運営までの流れ」マニュアルを作成し、スムーズにほほえみ教室につなげるシステムをつくることができた。 ・「個別の教育指導計画」について、保護者の了承を得た上で作成し、手立てやその評価について各学期末に保護者と共有することができた。 ・生徒情報をGoogleフォームで入力していく形に変更し、いつでも端末で情報を共有できる環境を整えた。 ・次年度入学する附属小6年生の児童について、附属小コーディネーターの先生と連携を取りながら、情報共有を行うことができた。 ・6月中旬の放課後、特別支援学校の就労支援コーディネーターの山下和彦先生をお招きして、「知的障がい生徒(療育手帳所有)の中学校卒業後の進路」についてお話していただいたことで、中学校卒業後の進路保障に対する意識が高まった。 ・保護者や本人の希望により放課後学習会を開催し、学力面でのサポートを行うことができた。 ＜課題＞ ・「不登校傾向児童生徒の状況活用シート」について、活用があまりできなかったため、効果的な活用方法などを部会でも話し合っていきたい。 ・特別支援教育に関する研修会等、教員全体で学びの機会をつくっていききたい。</p>	<p>●特別な支援を必要とする生徒は増加しており、今後、特別支援教育に関する知識やスキルは重要になってくる。附属中においても今年度も特別支援教育に係る研修会が持てることと思ふ。 ●中学校での特別支援教育は、高校進学を控え、とても重要であると考え。現在中学から特別支援学校でなく一般校へ進学する手帳を持つ生徒も増えてきている。（そしてそれが高校卒業時、または大学卒業時の就職指導に影響する。） グレースーンのまま進学するのか、まずは手帳を取得し、その後本人の選択肢を増やしておくのかは、最終的就職の時に問われること。いずれにしても保護者と関わることの多い中学校での親子への情報提供が重要である。 ぜひ生徒と保護者の長期的な働き方や生き方を意識した、関わりを持っていただきたい。 ●組織的な支援体制が具わるとともに、特にデジタル化（Googleフォーム）による情報共有の効率化や、外部専門家を招いた研修によるキャリア支援意識の向上は大きな成果。 ●附属の「特別支援教育」は、多職種連携、ICTの活用、家庭との協働、外部専門家との連携など、多面的で質の高い取り組みが進んでいると思う。生徒一人ひとりの状況に寄り添い、継続的かつ丁寧な支援を行う姿勢は、学校としての大きな強みであり、今後も生徒の状況に応じた支援体制がさらに充実していくことを期待する。 ●日々の学校生活の中で困り感がある生徒を的確に把握し、「個別の指導計画」作成の有無や必要となる支援内容についての検討を行うなど、組織的に適切な対応がされている。</p>	<p>●特別支援教育に係る研修会の実施 ・発達障害の理解と受け入れ ・個別の教育支援計画・指導計画 ・インクルーシブ教育の実践 ・SC、医療や福祉との連携 など ●生徒本人及び保護者との密なやりとり ・本人の思いや願いを引き出すための信頼関係を構築する。 ・幅広い将来の進路選択肢を情報収集する。 ●「不登校傾向児童生徒の状況活用シート」の活用 ・休みが続く前に、小さな様子の変化に気付くアンテナを高く持つ。 ・状況活用シートをもとに、今後の対応に生かす。 ●個別の教育支援計画の活用検討と整理 ・小学校とも連携し、切れ目のない適切な支援を引き継ぐ。</p>
<p>国際理解教育</p>	<p>・英語力を身につけ外国人と接したり、ネット上の情報から客観性を身に付け、国際的な視野を広げ、社会課題に目を向け貢献できる人になるために、教科や各学年、生徒会執行部や国際福祉活動部を通じて、津ユネスコ協会への活動参加やESD教育に取り組む。 ・デジタルツールを活用した国際交流と協働学習海外の学校とオンラインで繋がりを、協働学習を行う。</p>	<p>・英語科の充実した人数体制を生かし、授業に関わりを通して英語に触れる機会を増やす。そのために、互いの授業打ち合わせを綿密にしている。 ・オンラインを活用し、韓国と台湾の海外の生徒との交流を進める予定。その交流を通して、生活の中に英語を使用する場面を創造する。</p>	<p>＜成果＞ ・英語科の充実した人数体制を生かし、複数の教員が授業に関わることで、生徒が英語を使う機会が増え、学習への意欲も高まった。生徒は英語を「教科」として学ぶだけでなく、国際社会とつながるための「道具」として捉えるようになってきている。外国人と接したり、インターネット上の多様な情報に触れたりする中で、異文化理解や情報を客観的に捉える力が育ち、国際的な視野を広げることができた。デジタルツールを活用した海外の学校とのオンライン交流や協働学習により、生徒は実際に英語を使う機会を体験することで学習の目的意識が一層高まった。 ・課題→生徒の英語力は個人差があり、国際交流やオンライン協働学習に不安を感じる生徒もいる。すべての生徒が安心して参加できるよう、事前の表現練習、ICT操作の支援など、一層きめ細かな指導体制を整えたい。さらに、国際交流を一過性の行事で終わらせず、日常の授業や学校生活とどのように結び付けたいかが重要な課題である。英語科だけでなく、他教科や生徒会活動、部活動とも連携しながら、継続的で実感のある学びにつなげていく工夫が求められる。</p>	<p>●個人差があることによる。自信を持って話せるように、きめ細かな指導をしていただきたい。 ●今後の語学教育の礎ともなる時期でもあるので、できれば中学生のうちから個別対応をしていただき苦手意識を払拭してもらいたい。 ●英語を単なる知識ではなく「道具」として捉えさせた点は大きな進歩である。複数体制による指導が、生徒の心理的ハードルを下げ、主体的な学びを引き出す鍵となった事は大きな成果。 ●附属の「国際理解教育」は、英語科の体制強化、ICTを活用した海外交流、異文化理解の深化など、多面的で質の高い取り組みが進んでいると思う。生徒が主体的に海外交流やオンライン協働学習に不安を感じる生徒もいる。すべての生徒が安心して参加できるよう、事前の表現練習、ICT操作の支援など、一層きめ細かな指導体制を整えたい。さらに、国際交流を一過性の行事で終わらせず、日常の授業や学校生活とどのように結び付けたいかが重要な課題である。英語科だけでなく、他教科や生徒会活動、部活動とも連携しながら、継続的で実感のある学びにつなげていく工夫が求められる。</p>	<p>・生徒の個人差に応じた個別最適な指導を一層充実させ、英語での発話に自信を持たない生徒へのきめ細かな支援を強化する。 ・中学校段階における苦手意識の早期発見・早期支援の仕組みを整備し、「分かる・使える」実感を積み重ねさせる指導を推進する。 ・複数指導体制の強みを生かし、英語を実際に使用するコミュニケーション活動の量と質のさらなる充実を図る。 ・ICTを活用した海外交流を継続・発展させるとともに、日常授業との関連を明確にし、活用場面の拡充を図る。 ・異文化理解の学習を単発的な体験で終わらせず、事前・事後学習を含めた体系的なカリキュラムとして整理・充実させる。 ・英語科の充実した指導体制を学校全体の国際理解教育の推進力として位置付け、教科横断的な取組を促進する。 ・生徒が世界とのつながりを実感し、主体的に学びに向かう態度を育成できる教育環境の整備を継続的に進める。</p>
<p>生徒会活動</p>	<p>・生徒会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員としてより良い学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする、自主的・実践的な態度を育てる。 ・生徒会活動の計画や運営（生徒総会運営、ノーチャイム週間、挨拶運動、活動部会、いじめ防止のためのピンクシャツ運動） ・異年齢集団による交流（生徒会オリエンテーション、部活紹介運営、活動部会、行事） ・生徒の諸活動についてのICT活用 ・学校行事の運営・協力（式関係、体育祭、文化祭、附中のハーモニーなど） ・ボランティア活動などの社会参加</p>	<p>・学級⇄生徒議会⇄生徒会執行部で情報の共有・発信を行い、組織的な取り組みを進めていく。 ・広報活動部と連携し、生徒会活動についての情報共有を行う。また、自校の魅力を外部へ発信するとともに、外部との交流・連携した取り組みを行う。 ・執行部からの連絡をロイノート上で行ったり、ロイノート上に目安箱を設置するなど、生徒会活動においてICTの活用を広げる。 ・学校行事における計画・運営等の生徒会活動の活用を推進する。 ・外部連携活動部と連携し、青少年赤十字団体の活動などに積極的に関わっていく。</p>	<p>＜成果＞ ・定期的な生徒議会の開催により、各学級での状況を共有し、学校全体で校内の問題について考え取り組むことができた。 ・生徒が主体となって、体育祭や文化祭の計画・運営を行い、最後まで行事をやり遂げることができた。 ・生徒会が学校代表としてボランティア活動に参加し、様々な国の人や他校の生徒との関わりを通して学んだことを、自校での活動に活かすことができた。 ・各活動部を連携を取り、必要に応じて話し合いを行い、生徒が主体となって学校運営にかかわることができた。 ＜課題＞ ・挨拶やマナー、モラルについて「理解してできる」段階から「自然にできる」段階へと定着させる継続的な取り組みが必要である。 ・目安箱の意見をどのように生徒会活動へ反映するかを明確にし、フィードバックの機会を設ける必要がある。 ・生徒会の取り組みをより多くの人に伝えるため、学校ホームページやSNS、学校新聞、ポスターなどを活用した広報活動の充実が求められる。 ・小中連携の強みを生かし、合同挨拶運動や交流イベントなど、継続的かつ具体的な取り組みを計画・実行していく必要がある。</p>	<p>●生徒会活動は、生徒が主催者である自覚を持つ効果的な活動だと考える。自分たちの意見が学校の規則などに反映することを体感する場でもある。先生がたには生徒を信じてその結果まで見守っていただきたい。 ●生徒議会を軸とした学級・執行部の連携が機能しており、学校全体の課題共有が仕組み化され、特に「ボランティアを通じた外部連携」を自らの活動に還元できている点は、高く評価できる。 ●附属の「生徒会活動」は、生徒が主体的に学校づくりに関する姿勢が強く、自治的な力や社会性を育む場として非取り組んでいる点、学校の大きな強みであると思われる。今後も生徒会が学校の中心として、より良い学校づくりに貢献していけることを期待する。 ●生徒がより良い学校生活づくりに主体的に参画できるよう、学級・議会・執行部が双方向につながりをもつ活動ができおり、校内外でさまざまな成果を上げることができている。</p>	<p>（1）挨拶・マナーの文化化 → 「理解」から「自然にできる」へ【方向性】挨拶やマナーを一時的な指導ではなく、学校生活の中で実際に実践される文化として定着させる。 【具体的な工夫案】 ・生徒会を中心とした継続的な挨拶運動の実施 ・学校新聞や掲示物、ポスターによる情報発信 ・良い行動を紹介・共有する仕組みづくり（掲示や放送など） ・行事や日常生活の中で、挨拶やマナーを意識する機会の設定 （2）意見反映の仕組みの充実 → 生徒の声を学校づくりに【方向性】目安箱や学級からの意見を、生徒会活動や学校運営へより明確に反映できる仕組みを整える。 【具体的な工夫案】 ・目安箱の意見の整理と共有（議会で報告など） ・検討結果や対応状況を生徒へフィードバックする機会の設定 ・学級代表と執行部が定期的に意見交換する場の充実 ・生徒が「意見が学校に生かされている」と実感できる仕組みづくり （3）広報活動の充実 → 生徒会活動の見え方【方向性】生徒会の取組を校内外に積極的に発信し、生徒や地域に活動の意義を伝えていく。 【具体的な工夫案】 ・学校ホームページやSNSを活用した活動紹介 ・学校新聞や掲示物、ポスターによる情報発信 ・行事や活動の成果を生徒会へ共有する機会の設定 ・活動の様子を写真や動画で記録・発信 （4）小中連携の充実 → 附属の強みを生かした活動へ【方向性】小中連携の特色を生かし、児童生徒が交流しながら学び合う活動を充実させる。 【具体的な工夫案】 ・小中合同の挨拶運動の実施 ・交流イベントや合同ボランティア活動の企画 ・児童会と生徒会の意見交換の機会の設定 ・継続的に交流できる仕組みづくり</p>

開かれた学校づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評議員会（兼 学校関係者評価委員会）による学校関係者評価を行い、学校運営の改善につなげる。 ・各種通信の発行、及びメール配信を活用し、情報発信と伝達を確実に行う。 ・学校アンケートを行う。 ・学校HPの更新する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・年3回の学校評議員会で、学校運営に関して熟議を行う。 ・学校関係者評価や学校自己評価の活用を行う。 ・学校通信や学年通信等の各種通信は、定期的かつ適切なタイミングで行う。 ・保護者に確実に情報が届くよう、メール配信の効率的で効果的な活用を進める。 ・学校アンケート等からの生徒・保護者の声を大切にし、教育活動の積極的な充実を図る。アンケートの結果を公表し、情報提供を行う。 ・HPを迅速に更新する。更新作業ができる職員を各学年複数名とする。 	<p><成果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・評議員会で話し合われたことを職員で共有し、よりよい学校づくりに活かすよう努めた。 ・学年通信は学年主任が作成し、毎月発行した。保護者への情報提供や啓発を行うことができた。 ・きずなメール配信により、学校からの周知や案内だけでなく、三重県等からのお知らせなども配信することで、効率やタイミングよく情報提供をすることができた。 ・HPの更新は、学校行事や部活動など、生徒の様子を配信できた。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校通信の発行を増やしていきたい。 ・HPの更新作業ができる職員は今後も増やす必要がある。 ・HPへの写真掲載に関して、個人の特定につながったり、犯罪に使われたりする昨今の状況から、掲載について検討していく必要がある。 ・学校外から届く案内等が、タブレットやメール等での配信を前提にしたものが少しずつ増えており、重要度を配慮した配信が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ●個人のプライバシーを尊重しながら、開かれた学校にしていくことには慎重なバランスが必要だと推察する。 ●関係者への情報提供が開かれた学校なのか、不特定多数の地域社会への発信をしていくのか。多様な人と繋がる学校であってほしいので、その意志が外部に伝わるような積極的な発信の仕方がいいと考えられる。 ●「きずなメール」の活用によるタイムリーな情報共有や、学年通信の定期発行が保護者の安心感につながっている点を高く評価。 ●附属の「開かれた学校づくり」は、情報発信の充実、外部との連携、ICTの活用など、多方面で成果を上げていると思う。保護者や地域に対して学校の姿を積極的に示し、信頼関係を築く取り組みが着実に進んでいる点は、学校としての大きな強みであり、今後も安全性と透明性を両立させながら、より開かれた学校づくりを進めていかれることを期待する。 ●各種通信の発行などにより十分に情報提供がなされている。HPに掲載する写真については、データのサイズや人物の映り込み等について細かなルールのもとにチェックすることが必要となっている。更新作業ができる職員に限られたメンバーになると作業は大変である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・行事等の後、情報が新鮮なうちに、HPを更新するよう努める。内容、頻度ともに充実させる。一方で、写真を始めとしたプライバシーや情報管理には十分注意を払う。 ・HP以外のツールによる発信を進めていく。その際、情報管理には十分注意を払う。 ・更新作業ができる職員を増やす一方で、管理体制を整える。 ・誰に何を発信したいかを明確にし、内容やツールの使い分けを検討していく。 ・探究活動の中で、地域との関わりを持つ場面を作る。
-----------	--	--	---	---	---